義姉弟

ロティア・エレライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
義姉弟

【Ｎコード】
Ｎ２１０４Ｗ

【作者名】
ロティア・エレライ

【あらすじ】
まったく血のつながってない姉と弟の恋愛ストーリー　姉視点で物語りは進んでいきます。

かわいいけど憎い弟

女は精神年齢が高めらしい。そんなことを言った日、私は弟に、「じゃあ姉ちゃんじゃなくておばちゃんだ。」と言われ、私は「じゃあ君は一生女の子の格好をして、男の娘でいなさい！」と追い掛け回した。

「やーだよ」と言いながら逃げ回る義弟の笑顔は憎らしいくらい可愛くて、いつもイライラするほどだった。

でも、そんな弟は、可愛いと言われることがコンプレックスで、性格はびっくりするくらい男前。だから、結局女の子にモテるよね。家に遊びに来た女の子は真っ先に私が誰かを聞いて、そして安心する。

私も学生ならよかったのにな。たった3つしか離れていない歳が、恨めしく思える。

———ねぇ、栄太（えいた）？こんな姉ちゃん、気持ち悪いですか？

だらしない格好で椅子に座り、眠いのか、何度も頭を落とす栄太を横目で何度も見ながらハラハラする。

「栄太？」

「ん。」

返事はするけれど、意識はすでにここにあらず。

「眠いの？」

「ん。」

「部屋行きなよ？」

「ん。」

さっきからこの繰り返し。

「栄太？」

「……。」

ついに返事がなくなって、変わりにスー、スーという寝息が聞こえはじめた。
「そんなところで寝たら姉ちゃん、キスするよ？嫌だったら今すぐ部屋に行きな。」
栄太は、起きる気配も見せない。私がいても全く意識されてないと言われているようで、ちょっとムカつく。
「栄太。姉ちゃんちょっとむかついたぞ。本当にキスするよ？」
栄太はやっぱり起きない。
栄太が好きと気付いたのはいつだっただろう。最初は小生意気なガキだと思ったけれど、栄太の本音に触れて、傷に触れて、いつしか守ってあげたいとさえ思うようになった。好きと気付いてからは、色仕掛けだって頑張ったのに、栄太はこちらを見ようともしなかった。
思春期でしょ？少しは胸とか興味ないわけ？そう思ってバスタオル一枚を巻き付けたままテレビを見てるふりをしたこともあるけど、栄太はすぐに顔をそらしてしまった。栄太が弟になったのは、四年前。栄太がまだ、中学校二年生の時だった。その時は、本当にまだお互いガキで、何度も衝突したりした。でも、ふと見せた栄太の本音を知った時、私は栄太を好きになった。栄太は、母親意外に心を許せる人がいなかったのだと、そう理解した。
「栄太……。」
長いまつげが光っていた。髪だってサラサラになびいている。こいつ、本当は女の子なんじゃないのか？ちくしょう……なんて思いながら栄太の柔らかそうな唇に、自分の唇をそっと重ねた。
栄太は、起きなかった。
放っておくわけにもいかないから、なんとか起こそうとしたけれど、起きなくて、仕方なく上布団をもってくると、栄太にかけてあげた。
私は短パンにカップつきキャミソールでベッドの上にねっころがると、そのまま寝てしまった。

アホマキ

朝起きると、栄太がすでに起きていた。
「あれ、おはよ、早いね？」そう声をかけると、栄太はこちらを見ずに、「誰かさんが机に寝かせたままにするから腰が痛くて起きたんです。」と皮肉を言った。
「なにぃ！？私は起こそうとしたんだからね！？」
「ハイハイ。」
洗面所からどいてもらうと、私は目を見開いた。
首筋あたりにピンクの痣があったのだ。多分虫さされだろうが、これはキスマークにしか見えない。焦った私は栄太を見たが、栄太は全く気付いた素振りは見せずにパンを焼いていた。
夏休みなので栄太は学校がない。
両親は仕事で、私は今日はローテーションで休みだった。休みでよかった。寝癖がなおらないのも理由の一つだけど、こんな虫ささされ、誰かに見られて勘違いされたら大変だ。
「卵焼き、作るけど。いる？」
栄太に尋ねると、栄太は「ん。」と頷いた。
栄太は、中2の時こそ私より背が低かったのに、いつの間にか私の背を追い越していた。それでも可愛いと言ったらきっと栄太は怒るだろう。
「今日用事は？」
「ない、姉ちゃんは？」
「栄太と休日をゴロゴロ過ごす事。」
私が笑って答えると、栄太も「なんだよ、それ。」と笑った。
「栄太、彼女できた？」
「……姉ちゃんは？」
「いそうにみえる？休日を家で過ごす女にさぁ。」
「同じ台詞を返そうか？」

「いい。でも不思議だね、栄太モテるのにね。」
「モテない。」
「モテてるじゃん。」
「……好きな人が振り向いてくんなきゃモテるなんて言えない。」
ボソッと呟いた栄太の声に、私は心臓がえぐられる思いがした。だけど、努めて冷静に、「好きな子いるんだ？どんな子？」と聞き返した。
「おてんばで、無防備。」
それだけ答えると、栄太は焼けた食パンにかじりついた。「はい、卵焼き。おてんばで、無防備かぁ。かわいい子なんだろうね。」出した卵焼きを見ることすら苦しくなって、胸焼けしそうだった。でも無理やり押し込むと、案外体は拒否しないものですんなり胃におさまった。
「……姉貴の馬鹿。」
「何おぅ？栄太の馬鹿。」私の気持ちに気付かないくせに。栄太はムキになって言い返してきた。
「アホ槙！」
「な！寿司ネタみたいじゃん！私の名前はカッパ巻きとかそういうのとは違うんだぞ！？」
そう怒ったら栄太は、吹き出して笑った。それから私を見て、すぐに目を逸らした。
「栄太。」
「ん？」
「なんで目そらすの。私のこと、嫌いじゃないよね？」
そう、嫌いじゃないはずなんだ。だってこうやって笑いあえたりするんだから。でも栄太は私を滅多に見ようとしない。
「ねぇ、栄太。」
答えようとしない栄太のそばに行き、栄太の足に手をおいた。ビクリと、栄太の体が動いたけれど、それでも怯まずに栄太の顔に手を伸ばし、こちらをむかせた。

栄太は、目を泳がせて私を見ようとしないので、顔を近付けたら思わずドキリとした。一瞬だけど目が合ったのだ。ああ、やっぱり可愛い顔してるな、この子。と思う反面、私とは違う体付きである栄太にドキドキしたりもしていた。心臓の音が栄太に聞こえていなければいいけれど。

「栄太、答えなさい。どうしてそんなに頑なに私を見ようとしないの。私だって傷つくんだよ？」

「……言、えるわけ……ねぇだろ……。」

「え？」

聞き返そうとしたら栄太は私を振り払って逃げようとしたので慌ててタックルしてその場に押し倒した。

「なんで逃げようとするの！？」

心臓が早鐘を打っている。私、栄太の上に乗ってしまった！慌てて体を起こしたけれど、違う。さっきの音……私じゃ……ない？

観念したのか、栄太はその場に大人しく寝そべっていた。そっと栄太の胸のうえに手を置くと、私と同じくらいの早さで栄太の心臓が動いていた。

「……栄太の心臓の音……早いよ？」

そういうと、栄太は顔を真っ赤にし、顔を隠すように腕で覆った。私もつられたように赤面する。

「わかっただろ？もうどいてよ。俺、槙の事、表面上は姉ちゃんって言ってても、姉だなんて思えないんだ。」

「……栄太、それ、本当？」

「気持ち悪いだろ。」

栄太が私を退かそうと手を足に置きながら起き上がろうとした時、私は栄太にキスをした。

「え……？」

栄太は、困惑したまま固まっている。

「嬉しい、私も栄太の事……弟なんて思えなかったから……。」

そっと栄太の手をとると、私の胸のうえに置いた。そして、私は「

気持ち悪いでしょ？」とちょっと笑って見せた。
栄太は、私を抱き締めると、「クソッ、早く言えよ！アホ槙！」と言った。
「それはお互い様よ、馬鹿栄太！」
その後私達は、何かが崩壊し、崩れ落ちるようにいろんな行為をした。口では言えないような行為もしたし、とにかくずっとくっついていたように思う。
「大体さー、槙は、無防備すぎるんだよ。そんな肌さらしてさ……バスタオル一枚だった時なんか、完全俺が男だって事忘れてんでしょ。そんな状態で言えるか？」
「あ、あれは！全部計算ですぅ！せっかくこっちが体張ってんのに、栄太はこっち見向きもしなかったじゃん！もう、本当は、女に興味ないんじゃないかと思ったよ！」
「大有りですよ、恥ずかしさのあまり見れないくらいね。」
栄太は皮肉を言って私を抱き締めた。何もいらない。そう思えるほど幸せだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2104w/

義姉弟

2011年9月21日23時12分発行